

辺野古通信

第17号 2009年8月31日



5月16日のキャンプ・シュワブ

発行 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座
沖縄講座 HP <http://www7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>



7月29日のキャンプ・シュワブ(ジュゴンネットワーク沖縄のブログから)

アセス法違反の施設建設工事を許すな!

■アセス法を無視したキャンプ・シュワブ内の兵舎等の施設建設工事が着々と進められている。上の5月16日と7月29日の写真を見比べて見よう。沖縄防衛局の見解はこうだ。「キャンプ・シュワブにおける隊舎等の建設工事は、普天間飛行場からの軍人・軍属等の転入に伴う人口増加等に対応するため、隊舎、庁舎等の飛行場施設とは関係しない建物等を事業実施区域外に機能的かつ効果的に再配置することを目的とするものであり、代替施設建設事業とは事業の目的も実施区域も異なる事業であることから、環境影響評価の対象に含める必要はない」。こんな言い訳が通用すると本気で考えている

のか。普天間代替施設＝新基地建設工事と一体の動きであることは明らかだ。■7月11日の09連続講座〈沖縄・歴史と現在〉第1回の「反国家宣言」上映集会は約60人が参加。基地撤去をめざす県央共闘会議・ピースサイクル神奈川・自治労横浜本部と各支部など賛同・協力いただいた団体・個人みなさんに感謝します。■7.11集会では緊急アピールで横浜港大さん橋への軍艦入港に抗議し横浜市長に送りつけた。21日には米海軍イーゼス艦・マケインが入港！(4頁の報告記事参照)

■辺野古・高江カンパは累計1,049,762円(8月31日現在)。カンパを!

郵振00210-0-2021 沖縄連続講座

第2回講座〈沖縄・占領と現在〉へ参加を!

10月2日(金)18時半 県民サポートセンター304号(横浜駅5分)

資料代 500円

講師: 田仲康博さん(国際基督教大学)



■沖縄の〈占領〉は、終わったのか? 田仲さんは「占領が生み出した時空間に未だ囚われの身となっている沖縄において、今もっとも必要なことは、「復帰」の意味を問い直すことなのだ」と指摘する。田仲さんの専攻は社会学・メディア論・文化研究。共著に『沖縄に立ちすくむ』(せりか書房2004)など。

〈アジア〉の視点から問い返す 〈沖縄と日本〉



ドキュメント映画『反国家宣言～非日本列島地図完成のためのノート』は、70年代初頭に制作され95年に再編集された貴重な記録映画。制作者の山崎佑次監督、大阪のプラネット映画資料図書館の協力で横浜上映が実現。沖縄の日本への〈復帰＝再併合〉直前の沖縄青年同盟（「日本復帰」ではなく「沖縄の自立と解放」を求めた在日沖縄青年たちのグループ）の活動から始まり、雪の北海道＝アイヌモシリ（アイヌの大地）の風景で終わる壮大なスケールで描く。〈アジアの視点〉から日本の侵略と戦争の近現代史を撃つモノクロの映像は、仲里効さんの講演「〈復帰＝再併合〉を問う」の問題提起も含めて、参加者に鮮烈な印象を残しました。

映画の冒頭に映し出される沖縄青年同盟の議論の輪の中に、若き日の仲里効さんの姿も映し出される（左上写真）。上映終了後、講師の仲里効さんは「ちょっと斜めに構えながら見ていました」と笑いを誘いながら、1970年前後の沖縄から出てきた青年たちが置かれた状況はどうだったのか、在日沖縄青年たちがどのように考えていたのか、語り始めました。（以下の講演要旨は編集部の責任でまとめました。映像の時代背景を語った講演の前半部分は紙面の都合で省略し、「〈復帰＝再併合〉を問う」のテーマに沿った後半部分を掲載します。前半部分とあわせて、講演録としてのHP等へ掲載予定。）

仲里効さん講演要旨（後半部分）

ことは薩摩の琉球侵略から400年、1879年の日本国家による琉球処分から130年にあたり、沖縄の中で試みが行われている。地元の沖縄タイムスと琉球新報が年間を通した大型の企画を掲載し、それとは別に市民レベルで「問う会」ができてシンポジウムを3回開き、さらに沖縄史研究者が中心になったシンポジウムも開催されている。こういう現象をどのように考えるか。

400年前の薩摩の侵略は、当時の幕藩体制化における東アジアの関係の起点になった。東アジアの国際情勢と薩摩の琉球侵略は密接に関係していた。明治国家の琉球処分も近代日本のアジア侵略の起点になった重要な出来事。琉球処分の前後に台湾出兵が行われ、日清戦争によって台湾を領有し、日露戦争を経て韓国を併合し、中国への植民地主義侵略に突き進んでいく。このように琉球処分は、近代日本がアジア太平洋に膨張していく

沖縄の歴史認識を東アジアの文脈にどの様に接続させていくか。どの様に開いていくか。

起点になっている。そのことを改めて問い直していく。400年前の出来事、130年前の出来事を、沖縄という場所は、非常にホットになりながら問い返していく。そういう場所は、おそらく日本中どこを捜しても無い。その深層にあるものはいったい何なのか。それを考えざるを得ない。

意表を衝かれた韓国の研究者の発言

2週間ほど前に韓国に行って来た。最近できた韓国の映像資料館で20本の沖縄映画を上映する企画があり、シンポジウムに招かれた。沖縄に向ける韓国の人々の関心と、沖縄映画に対する論及の深度には非常に啓発された。ソウル大学の沖縄戦後史を専門としている研究者が、沖縄のことを調べれば調べるほど分からなくなってくることがある、と言っていた。なぜ沖縄で日本復帰運動



が起こったのか、それは私にとっては謎である。韓国の研究者からそういう言い方をされ、意表を突かれた。その研究者の発言には、日本の植民地支配からの離脱と解放のあり方についてどう考えるのか、が喚起されていると思った。日本の植民地支配に対して朝鮮でも中国でも台湾でも抗議運動や独立運動が起こる。そして日本の敗戦によって、旧植民地から独立の方向が出てくる。しかし沖縄からは日本の植民地支配からの離脱の道を選択せずに、日本に帰るという道を選択した。そのことが東アジアの視点からすれば、非常に奇異に見えた。「なぜ沖縄で日本復帰運動が起こったのか」、という問いには「なぜ沖縄は自立できなかったのか」、というもう一つの問いかけが含まれている。東アジアの文脈で見れば、沖縄の戦後に起こった日本復帰運動というものは、かなり例外的な出来事だった。そのことをどう捕らえるか。沖縄の内部で、「問う会」の活動や琉球新報や沖縄タイムスというジャーナリズムの中で、改めて考える動きが起こっている。これは、沖縄の戦後史に対する疑問に、沖縄の内部から答えていこうとする潜在的な動きではないか。

「400年」と「130年」を問うとは、よく批判として出てくる琉球王国時代へのロマン主義的な憧憬、復古運動などではなくて、沖縄における歴史認識をどう組み替えていくのか、沖縄の歴史認識、時間や空間をいかに東アジアの文脈の中に接続させていくのか、ということ。「400年」と「130年」を問うことは、日本と沖縄の関係史を現代の文脈で問い返していくと同時に、東アジアの文脈の中でどのように沖縄が開いていくのか、というもう一つの文体の発見への模索が、それらの動きの深層にある。この間の沖縄内部の動き、「400年」「130年」を問う動きを、今後どのような形で、どう深化させられるのか。この

ことが我々に問われている。

反復帰論の転生・80年代の憲法構想

我々が物事を考えていく一つの指針となったのは新川明さんや川満信一さんを中心にして展開された反復帰論。1960年代、1972年前後という状況の課題に対していかに答えるのか。言い換えると日本復帰運動という国家に包摂されていく主体のあり方、運動のあり方をいかに内部から批判していくのか。反復帰論の課題はここにあった。状況への対応でもあったが、反復帰論の内実は沖縄の近代を問い返し、批判的に検討していく試みだった。沖縄の近代を内部から批判していく作業であり、批判しながら復帰運動に替わる新たな方向性、新たな文体、文法を指し示していく作業だった。反復帰論が出た当時は、多くは反復帰論に対する懐疑、批判が一般的だった。これはいかに沖縄において、復帰運動の論理、日本へ同一化するものを内在化していったのか、いかに大きかったかの現われだ。復帰に対する反復帰で、復帰すれば反復帰論も消えていく。谷川健一さんや沖縄の権威ある研究者も、そう言っていた。しかし、そのような批判がいかに射程の短い考え方であったのかは、その後の沖縄の状況が証明している。1980年代に沖縄タイムス発行の「新沖縄文学」という雑誌が「琉球共和社会への架け橋」を特集し、琉球共和社会憲法私案と琉球共和国憲法私案が提示された。これらの動きは、反復帰論の80年代的な転生、変異と言える。反復帰論の政治的共同性をいかにして提示していくのか、という問題意識が彼らの中にあった。憲法構想が、実践の中へどう展開していくのか。当時も、あれは知識人の遊びだ。空想だ、という批判があった。沖縄の現実や沖縄の実践の中へどの程度それが根付いていくのか。実践がその構想をいかに獲得していくのか。これは未知数だが、1980年代にあの構想が出されたことは、沖縄の戦後史において記憶しておくべきことではないか。



集会には東京で活発に活動する沖縄・一坪反戦地主会関東ブロックのみなさんも参加。司会からも現在取り組んでいる新嘉手納爆音訴訟の最高裁宛署名が紹介され、東村・高江の那覇地裁宛仮処分申立て却下を求める署名などと共に、ロビーで参加者のみなさんに協力していただきました。

連帯アピールでは、沖縄講座も参加している基地撤去をめざす県央共闘会議副代表の檜鼻達実さんから発言。最後に、沖縄講座から緊急アピール「護衛艦の横浜港・大さん橋入港決定に抗議し、撤回を求める声明」を提起し、拍手で採択されました。



■7月21日(火)午前8時45分ごろに、ベイブリッジを潜り抜けるようにして、米海軍イージス駆逐艦ジョン・S・マケインが、ゆっくりと大さん橋に近づいてきた。(写真左上) ■9時過ぎには大さん橋に接岸。横浜市主催の歓迎式典が開催され、阿部副市長が迎えた模様。市民のいこいの広場である大さん橋も、マケインの周辺は「立ち入り禁止」の阻止線が張られ、近づくことはできなかった。■神奈川新聞のHPによればキム艦長は「横浜開港150周年という有意義な年に入港できて光栄」「マケインの入港は日米同盟を象徴している。東アジアの安全保障体制にとって大切に感慨深い」と述べた。市港湾局は「米海軍から150周年を祝いたいと申し出があった」「今回に限った話で前例にしない」としている。■とんでもない、キム艦長の発言に米軍側の狙いはむき出しだ。ノースドックの返還を毎年国に対して要望しながら、公共棧橋に軍艦を迎え入れる。横浜市は何を考えているのか。「ピースメッセンジャー都市」が聞いてあきれれる。■今回の米軍艦と自衛隊艦船の大さん橋寄港は横浜港の軍事化に向けた第一歩。横須賀でも「軍港の観光資源化」が進んでいるが、この日、大さん橋の入口には、「特別観覧クルーズ」の案内が掲げられていた(左下)。■横浜港の歴史に汚点を残す「歴史的決断」をした中田市長は、8月になって突然市長の職責を投げ出し、辞職してしまった。

7月に客船ターミナルである横浜港・大さん橋に自衛隊艦船と米軍イージス艦が入港！8月下旬になって、今度は横須賀港に原子力空母ニミッツが寄港した。ジョージワシントンの母港化が1年前。原子力空母2隻体制への布石では、と地元では怒りの声が高まり、8月22日から平和運動センターなどの抗議行動が続いている。母港化1周年抗議全国集会へ！9月26日(土)13時 横須賀ヴェルニー公園

2009年7月17日

横浜市長 中田 宏 様
横浜港湾局長 川口正敏 様

米海軍艦船「ジョン・S・マケイン」の大さん橋寄港に抗議する！

本日の神奈川新聞の報道によれば、7月18日から26日にかけて開催される「海フェスタよこはま2009」の中で、7月21日に米海軍艦船「ジョン・S・マケイン」が横浜港大さん橋に接岸され22日には一般公開されることが明らかとなった。

私たちは、この決定に強く抗議し、寄港計画の撤回を求める。

「マケイン」は、米海軍横須賀基地を母港とする最新鋭のイージス艦であり、海上配備型ミサイルSM3を搭載する能力があり、ミサイル防衛MDで中心的役割を担っている。すでに私たちは、海上自衛隊護衛艦の大さん橋寄港一般公開決定に抗議し、撤回を求める抗議声明を7月11日に発したところであるが、事態は、私たちの危惧したとおりに進みつつある。

観光スポットが集中するみなとみらい21地区に近接し、多くの民間船舶が行き交う大さん橋に軍艦を接岸し一般公開することなど、絶対に許されない。日米軍事再編により露骨に進められている民間港湾の軍事化の「地ならし」であることは明らかだ。港内の米軍提供施設ノースドックの返還を求める横浜市の基本姿勢とも矛盾し、横浜港の軍事利用に一貫して抵抗してきた横浜市民の思いを踏みにじる行為でもある。

横浜市長、港湾局長は、米軍艦・自衛艦の大さん橋寄港一般公開計画を撤回せよ！

沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座